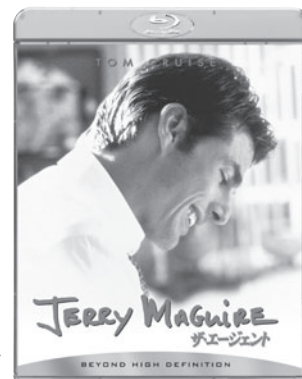


『ザ・エージェント』

1996年/アメリカ/キャメロン・クロウ監督作品

みんな心の中で思っていて
口にださないこと

会員 志村 知彦 (64期)



Blu-ray『ザ・エージェント』
2,500円(税込)
好評発売中
発売・販売元:ソニー・ピク
チャーズ エンタテインメント

1 全米プロスポーツ

全米プロスポーツは、米国民の精神的な支柱にとどまらず、成熟したビジネスモデルとして世界が注目していることは言わずと知れた事実である。だからこそ、選手、ファン、裏方、ビジネス、どの角度から見ても格好の映画の題材となる。

例えば、MLBを題材にした映画も、古くは「メジャーリーグ」, 「フィールド・オブ・ドリームス」, 最近でも「マネーボール」, 「人生の特等席」と、様々な立場の人物を主人公にした名作が揃っている。

本作品も、全米プロスポーツビジネス、それもエージェントを題材にしている。プロスポーツ業界では、選手年俵の高騰が度々問題とされるが、本作品は、まさにそうした問題が問われ始めた1996年のアメリカ作品である。

2 あらすじ

大手エージェント事務所に勤務するジェリー・マクガイアは、多数の選手を顧客に抱えて、チームとの交渉やスポンサーの獲得など、選手のマネジメントを一手に引き受ける屈指のエージェントである。

しかし、エージェント業は、選手の年俵を必要以上につり上げて、チーム経済を逼迫させ、他方、選手達には、高額な年俵を維持させるべく、身体のメンテナンスもそこそこに極限まで身体を酷使させるようになった。しかも、選手は契約に縛られて、ファンサービスすら自由にできない始末である。

そんな業界の最前線にいたジェリーが、ある夜、「僕の選手のプレーで、スタジアムに歓声が沸く!」という、エージェント業に対する熱い想いを抱いていた頃の夢にうなされるところから作品は始まる。利益を優先させるよりも、もっと選手との信頼関係に重点をおいた、健全な仕事をしなければならない。想いに突き動かされたジェリーは夜通して「提案書」を書き下ろし、勢いのままに翌朝には同僚たちに配布した。

しかし、「提案書」は、大手事務所にとって、甚だ目障りなものにすぎなかった。ジェリーは、たちまち事務所を

解雇され、顧客をもがれて、独立を余儀なくされてしまう。

ジェリーに賛同したのは、唯一の顧客で大口をたたいてばかりのアメフト選手ロッドとバツイチで子持ちの会計係ドロシーだけだった…。

3 サクセスストーリー?

この作品は、主人公が、建前と本音、理想と現実の狭間の中で、友人や恋人の支えに助けられながら、新天地での葛藤や裏切りを乗り越え、責任の重圧を跳ね返し、成長し、成功をなしとげるまでの物語である。

本作品は、プロスポーツの裏舞台であるエージェント業界を垣間見ることができるとともに、ビジネスサクセスストーリーとして十分に楽しめる。

もっとも、本作品は単なるスポーツビジネスものに止まらない。ラブストーリーであり、ヒューマンドラマでもある。また、社会風刺的な側面、加えてコミカルな要素もふんだんに盛り込まれており、さまざまな要素をうまく絡めた作品である。視点を変えて観ると、そのたびに新たな気付きを与えてくれて、新鮮さを失わない、そんな味のある作品である。

4 クワン

さて、もう一つ取り上げたいことがある。本作品には、ある理念・信念がテーマとして流れているということである。

作品中の言葉を使えば「みんな心の中で思っていて口にださないこと」であり、また「クワン(作品中の造語)」と呼ばれるものが、それである。

そして、作品中、随所にあられる、スポーツエージェントの祖、故ディッキー・フォックスの名言の数々にそれが集約されている。ここで具体的な紹介は避けるが、我々の弁護士業にも通ずる名言の数々は、作品中の絶妙なスパイスとなっている。

この作品を観た後には、一つの達成感を得ることができる。と信じてやまないが、それは、まさに「みんな心の中で思っていて口にださないこと」を共有できるからではないかと思う。実におすすめの作品の一つである。